各　　位

2022 年 2 月 10 日
株式会社リットーミュージック

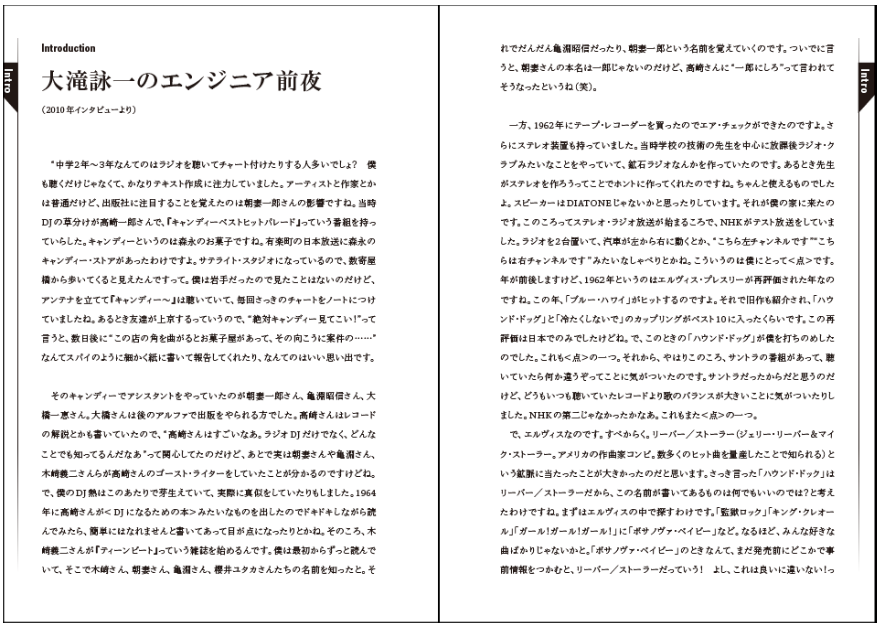
大滝詠一が＜エンジニア視点＞で語った唯一無二のインタビューを基に、
日記形式で構築したナイアガラ・レコーディング解説本が 3/18 発売！！

インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）は、『大滝詠一 レコーディング・ダイアリー Vol.2』を、2022 年 3 月 18 日に発売します。

大滝をタイム・ラインで追うことで、点と点が線になる制作ヒストリー

希代の名ボーカリストであると同時に、多くのヒット曲を世に送り出したソングライター、大滝詠一。彼が＜笛吹銅次＞というレコーディング・エンジニア・ネーム、＜多羅尾伴内＞というアレンジャー・ネームを使い分け、音創りに対して並々ならぬこだわりを見せていたことは、ファ

ンの間では広く知られているところだ。本書は、そんなサウンド・メイカーとしての足跡をダイアリー形式で追った記録である。



Introduction

大滝詠一のエンジニア前夜

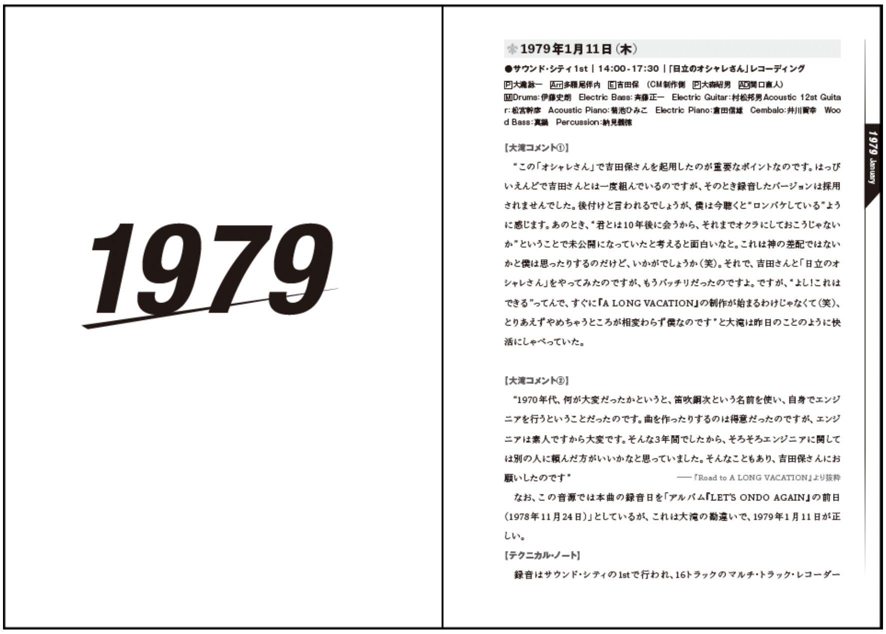
（2010年インタビューより）

“中学2年〜3年なんてのはラジオを聴いてチャート付けたりする人多いでしょ？　僕も聴くだけじゃなくて、かなりテキスト作成に注力していました。アーティストと作家とかは普通だけど、出版社に注目することを覚えたのは朝妻一郎さんの影響ですね。当時DJの草分けが高崎一郎さんで、『キャンディーベストヒットパレード』っていう番組を持っていらした。キャンディーというのは森永のお菓子ですね。有楽町の日本放送に森永のキャンディー・ストアがあったわけですよ。サテライト・スタジオになっているので、数寄屋橋から歩いてくると見えたんですって。僕は岩手だったので見たことはないのだけど、アンテナを立てて『キャンディー〜』は聴いていて、毎回さっきのチャートをノートにつけていましたね。あるとき友達が上京するっていうので、“絶対キャンディー見てこい!”って言うと、数日後に“この店の角を曲がるとお菓子屋があって、その向こうに案件の……”なんてスパイのように細かく紙に書いて報告してくれたり、なんてのはいい思い出です。

そのキャンディーでアシスタントをやっていたのが朝妻一郎さん、亀淵昭信さん、大橋一恵さん。大橋さんは後のアルファで出版をやられる方でした。高崎さんはレコードの解説とかも書いていたので、“高崎さんはすごいなあ。ラジオDJだけでなく、どんなことでも知ってるんだなあ”って関心してたのだけど、あとで実は朝妻さんや亀淵さん、木崎義二さんらが高崎さんのゴースト・ライターをしていたことが分かるのですけどね。で、僕のDJ熱はこのあたりで芽生えていて、実際に真似をしていたりもしました。1964年に高崎さんが＜DJになるための本＞みたいなものを出したのでドキドキしながら読んでみたら、簡単にはなれませんと書いてあって目が点になったりとかね。そのころ、木崎義二さんが『ティーンビート』っていう雑誌を始めるんです。僕は最初からずっと読んでいて、そこで木崎さん、朝妻さん、亀淵さん、櫻井ユタカさんたちの名前を知ったと。それでだんだん亀淵昭信だったり、朝妻一郎という名前を覚えていくのです。ついでに言うと、朝妻さんの本名は一郎じゃないのだけど、高崎さんに“一郎にしろ”って言われてそうなったというね（笑）。

一方、1962年にテープ・レコーダーを買ったのでエア・チェックができたのですよ。さらにステレオ装置も持っていました。当時学校の技術の先生を中心に放課後ラジオ・クラブみたいなことをやっていて、鉱石ラジオなんかを作っていたのです。あるとき先生がステレオを作ろうってことでホントに作ってくれたのですね。ちゃんと使えるものでしたよ。スピーカーはDIATONEじゃないかと思ったりしています。それが僕の家に来たのです。このころってステレオ・ラジオ放送が始まるころで、NHKがテスト放送をしていました。ラジオを2台置いて、汽車が左から右に動くとか、“こちら左チャンネルです”“こちらは右チャンネルです”みたいなしゃべりとかね。こういうのは僕にとって＜点＞です。年が前後しますけど、1962年というのはエルヴィス・プレスリーが再評価された年なのですね。この年、「ブルー・ハワイ」がヒットするのですよ。それで旧作も紹介され、「ハウンド・ドッグ」と「冷たくしないで」のカップリングがベスト10に入ったくらいです。この再評価は日本でのみでしたけどね。で、このときの「ハウンド・ドッグ」が僕を打ちのめしたのでした。これも＜点＞の一つ。それから、やはりこのころ、サントラの番組があって、聴いていたら何か違うぞってことに気がついたのです。サントラだったからだと思うのだけど、どうもいつも聴いていたレコードより歌のバランスが大きいことに気がついたりしました。NHKの第二じゃなかったかなあ。これもまた＜点＞の一つ。

で、エルヴィスなのです。すべからく。リーバー／ストーラー（ジェリー・リーバー＆マイク・ストーラー。アメリカの作曲家コンビ。数多くのヒット曲を量産したことで知られる）という鉱脈に当たったことが大きかったのだと思います。さっき言った「ハウンド・ドック」はリーバー／ストーラーだから、この名前が書いてあるものは何でもいいのでは？と考えたわけですね。まずはエルヴィスの中で探すわけです。「監獄ロック」「キング・クレオール」「ガール!ガール!ガール!」に「ボサノヴァ・ベイビー」など。なるほど、みんな好きな曲ばかりじゃないかと。「ボサノヴァ・ベイビー」のときなんて、まだ発売前にどこかで事前情報をつかむと、リーバー／ストーラーだっていう！　よし、これは良いに違いない!っ



1979

1979 January

1979年1月11日（木）

●サウンド・シティ 1st｜14:00-17:30｜「日立のオシャレさん」レコーディング

P大瀧詠一　Arr多羅尾伴内　E吉田保　（CM制作側　P大森昭男　AD関口直人）

MDrums:伊藤史朗　Electric Bass:斉藤正一　Electric Guitar:村松邦男 Acoustic 12st Guitar:松宮幹彦　Acoustic Piano:菊池ひみこ　Electric Piano:倉田信雄　Cembalo:井川貴幸　Wood Bass:真鍋　Percussion:納見義徳

［大滝コメント①］

“この「オシャレさん」で吉田保さんを起用したのが重要なポイントなのです。はっぴいえんどで吉田さんとは一度組んでいるのですが、そのとき録音したバージョンは採用されませんでした。後付けと言われるでしょうが、僕は今聴くと“ロンバケしている”ように感じます。あのとき、“君とは10年後に会うから、それまでオクラにしておこうじゃないか”ということで未公開になっていたと考えると面白いなと。これは神の差配ではないかと僕は思ったりするのだけど、いかがでしょうか（笑）。それで、吉田さんと「日立のオシャレさん」をやってみたのですが、もうバッチリだったのですよ。ですが、“よし!これはできる”ってんで、すぐに『A LONG VACATION』の制作が始まるわけじゃなくて（笑）、とりあえずやめちゃうところが相変わらず僕なのです”と大滝は昨日のことのように快活にしゃべっていた。

［大滝コメント②］

“1970年代、何が大変だったかというと、笛吹銅次という名前を使い、自身でエンジニアを行うということだったのです。曲を作ったりするのは得意だったのですが、エンジニアは素人ですから大変です。そんな3年間でしたから、そろそろエンジニアに関しては別の人に頼んだ方がいいかなと思っていました。そんなこともあり、吉田保さんにお願いしたのです”　――『Road to A LONG VACATION』より抜粋

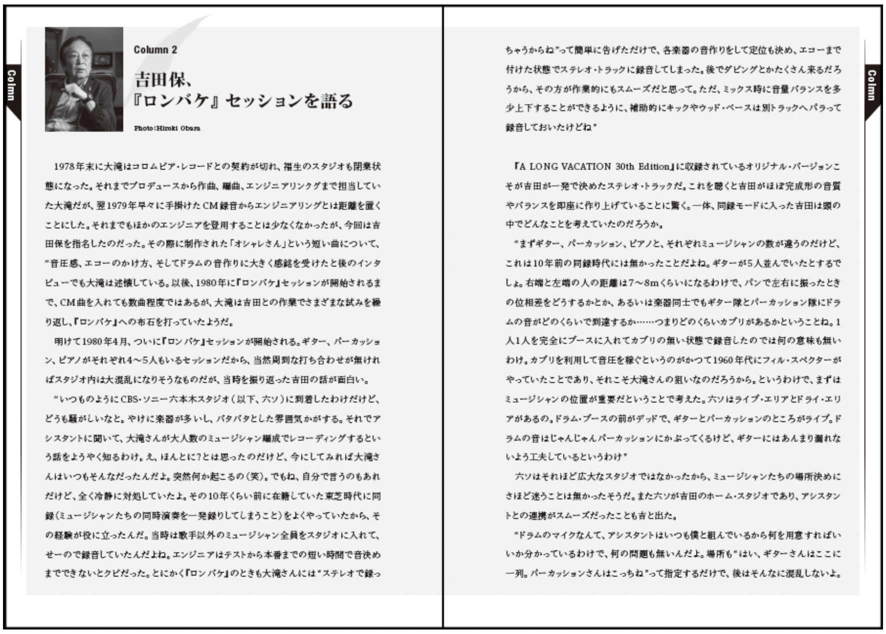
なお、この音源では本曲の録音日を「アルバム『LET'S ONDO AGAIN』の前日（1978年11月24日）」としているが、これは大滝の勘違いで、1979年1月11日が正しい。

［テクニカル・ノート］

録音はサウンド・シティの1stで行われ、16トラックのマルチ・トラック・レコーダー

本書で焦点を当てるのは 1979 年〜1982 年までの 4 年間。その間に生まれた名作『A LONG VACATION』をはじめとする大滝作品を対象に、本人への詳細インタビューはもちろん、レコーディングを共にした名エンジニア＝吉田保ら重要人物の証言を通して〈ナイアガラ・サウンド〉の謎に迫る。

【証言者】　吉田保、伊東俊郎、鈴木慶一、片寄明人、湯浅学、関口直人（ON・アソシエイツ）、斉藤文昭



Colmn

Column 2

吉田保、
『ロンバケ』セッションを語る

Photo:Hiroki Obara

1978年末に大滝はコロムビア・レコードとの契約が切れ、福生のスタジオも開業状態になった。それまでプロデュースから作曲、編曲、エンジニアリンクグまで担当していた大滝だが、翌1979年早々に手掛けたCM録音からエンジニアリングとは距離を置くことにした。それまでもほかのエンジニアを登用することは少なくなかったが、今回は吉田保を指名したのだった。その際に制作された「オシャレさん」という短い曲について、"音圧感、エコーのかけ方、そしてドラムの音作りに大きく感銘を受けたと後のインタビューでも大滝は述懐している。以後、1980年に『ロンバケ』セッションが開始されるまで、CM曲を入れても数曲程度ではあるが、大滝は吉田との作業でさまざまな試みを繰り返し、『ロンバケ』への布石を打っていたようだ。

明けて1980年4月、ついに『ロンバケ』セッションが開始される。ギター、パーカッション、ピアノがそれぞれ4〜5人もいるセッションだから、当然周到な打ち合わせが無ければスタジオ内は大混乱になりそうなものだが、当時を振り返った吉田の話が面白い。

"いつものようにCBS・ソニー六本木スタジオ(以下、六ソ)に到着したわけだけど、どうも騒がしいなと。やけに楽器が多いし、バタバタとした雰囲気かがする。それでアシスタントに聞いて、大滝さんが大人数のミュージシャン編成でレコーディングするという話をようやく知るわけ。え、ほんとに?とは思ったのだけど、今にしてみれば大滝さんはいつもそんなだったんだよ。突然何か起こるの(笑)。でもね、自分で言うのもあれだけど、全く冷静に対処していたよ。その10年くらい前に在籍していた東芝時代に同録(ミュージシャンたちの同時演奏を一発録りしてしまうこと)をよくやっていたから、その経験が役に立ったんだ。当時は歌手以外のミュージシャン全員をスタジオに入れて、せーので録音していたんだよね。エンジニアはテストから本番までの短い時間で音決めまでできないとクビだった。とにかく『ロンバケ』のときも大滝さんには"ステレオで録っちゃうからね"って簡単に告げただけで、各楽器の音作りをして定位も決め、エコーまで付けた状態でステレオ・トラックに録音してしまった。後でダビングとかたくさん来るだろうから、その方が作業的にもスムーズだと思って。ただ、ミックス時に音量バランスを多少上下することができるように、補助的にキックやウッド・ベースは別トラックへパラって録音しておいたけどね"

『A LONG VACATION 30th Edition』に収録されているオリジナル・バージョンこそが吉田が一発で決めたステレオ・トラックだ。これを聴くと吉田がほぼ完成形の音質やバランスを即座に作り上げていることに驚く。一体、同録モードに入った吉田は頭の中でどんなことを考えていたのだろうか。

"まずギター、パーカッション、ピアノと、それぞれミュージシャンの数が違うのだけど、これは10年前の同録時代には無かったことだよね。ギターが5人並んでいたとするでしょ。右端と左端の人の距離は7〜8mくらいになるわけで、パンで左右に振ったときの位相差をどうするかとか、あるいは楽器同士でもギター隊とパーカッション隊にドラムの音がどのくらいで到達するか……つまりどのくらいカブリがあるかということね。1人1人を完全にブースに入れてカブリの無い状態で録音したのでは何の意味も無いわけ。カブリを利用して音圧を稼ぐというのがかつて1960年代にフィル・スペクターがやっていたことであり、それこそ大滝さんの狙いなのだろうから。というわけで、まずはミュージシャンの位置が重要だということで考えた。六ソはライブ・エリアとドライ・エリアがあるの。ドラム・ブースの前がデッドで、ギターとパーカッションのところがライブ。ドラムの音はじゃんじゃんパーカッションにかぶってくるけど、ギターにはあんまり漏れないよう工夫しているというわけ"

六ソはそれほど広大なスタジオではなかったから、ミュージシャンたちの場所決めにさほど迷うことは無かったそうだ。また六ソが吉田のホーム・スタジオであり、アシスタントとの連携がスムーズだったことも吉と出た。

"ドラムのマイクなんて、アシスタントはいつも僕と組んでいるから何を用意すればいいか分かっているわけで、何の問題も無いんだよ。場所も"はい、ギターさんはここに一列。パーカッションさんはこっちね"って指定するだけで、後はそんなに混乱しないよ。

主要楽曲のトラック・シート図を基にした、新感覚の大滝サウンド分析

『A LONG VACATION』『NIAGARA TRIANGLE Vol.2』『NIAGARA SONG BOOK』といった、この期間に大滝が作り上げた作品の中から、数多くのトラック・シート図を掲載。どのトラックにどの楽器パートが録音されていったのか、コアなファンのみならず、当時のレコーディングに興味のある世代にも貴重な資料となるはず。また CM 曲や他アーティストのプロデュース曲のトラック・シートも豊富に用意し、大滝ならではの録音マジックを分析していく。

1980

たりするものだが、そういうのは一切許されず、ひたすら刻み続けよという指令が下っている。ただ曲によってはリズム録りでは壁に徹するよう指令が出ても、ダビングではある程度自由なプレイが許されたりもする。その辺りのさじ加減は、まず録ってみて随時判断ということのようだ。この日は工程としてはこれだけになるが、ここに到達するまでに少々難航した形跡(何かを足してみたがイマイチなので消去して別の音を足すなど)がテープやトラック・シートに残っている。

【証言】

アコースティック・ギター隊の常連として『ロンバケ』以降の作品に参加した吉川忠英と安田裕美の証言を聞こう。

安田 "大滝さんは各セクションの代表にアレンジを伝達していくんですけど、生ギターの場合、大体僕が言われることが多かった。それで"ここはジャン、ジャン、ジャン、ジャカ、こっちはジャカ、ジャカ、ジャン。ジャカ"といったようにアップやダウンも含めた指定があって、全部口頭で教えてもらうんです(笑)。それが一通り頭から最後まで行ったら、また僕がみんなに伝達していくという"

吉川 "安田が、大滝くんの指示を譜面に書いて、みんなのところに帰ってくるわけ。で、"じゃあ発表してください!"と(笑)。"Aの1小節目はジャラーン"って言われると、"はい、白タマねー"って感じで、自分の譜面にまた書き込んでいくという"

――『アコースティック・ギター・マガジン2021年6月号 Vol.88』より

●CBS・ソニー信濃町スタジオ|山口百恵「哀愁のコニー・アイランド」ミックス

【メモ】

同日、山口百恵の「哀愁のコニー・アイランド」が完成。ミキサーは前島祐一。翌日にカッティングが行われた。

1980年4月24日(木)

●CBS・ソニー六本木スタジオAst|18:00-24:00|M-3「カナリアン・アイランド」(後の「カナリア諸島にて」)レコーディング(Take 1)(Take 2 OK)

P大瀧詠一 Arr多羅尾伴内 E吉田保 Assist E伊東俊郎、石橋守

MDrums:上原裕 Electric Bass:金田一昌吾 Electric Guitar/Acoustic Guitar×複数 Percussion×複数 Acoustic Piano 他

Velvet Motel 1980.Apr.21 - 1980.Oct.16

メモ

●TRACK 3-4のオーケストラ・トラックにはアコギやチェンバロはドラムなどと一緒に同時録音されている。TRAK 5から10までは既に録音されていることをもう一度行っている。

●TRACK 17から23までのProphet-5*はイントロ差し込み用に後からダビングされたものなので、ミックスは本編とは別に行われている。従って仮にこのまま頭からミックスをするとProphet-5部分は元のコードと違う演奏をしているので破たんしてしまう。

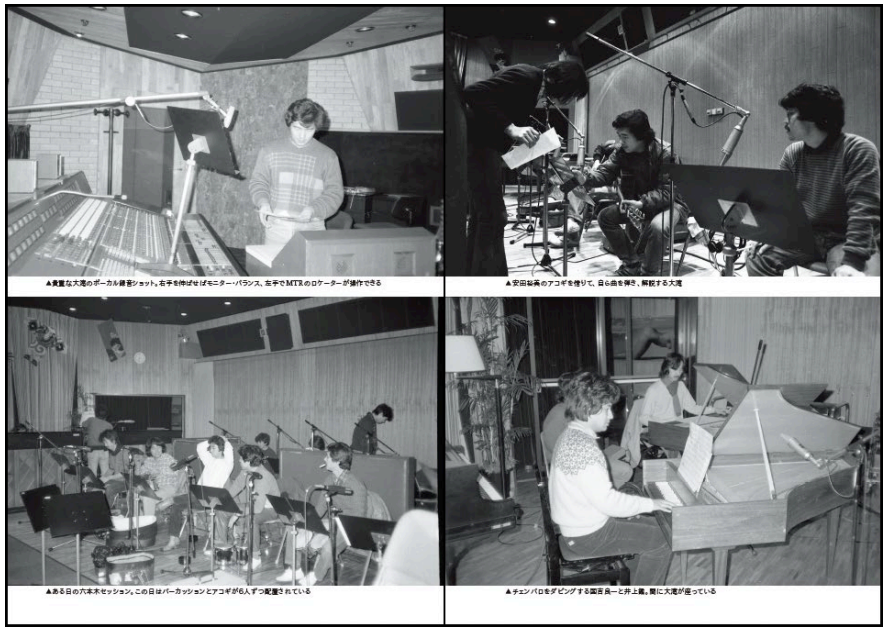
●TRACK 19, 23のRAJIEは歌部分はほとんど同じだが、最後のスキャットがかなり違う。

●TRACK 14のシンセ・ドラムは大滝がたたいている。

当時のレコーディングの様子がうかがえるスナップ写真も豊富

＜ナイアガラ・サウンド＞と言われる、多数のミュージシャンを広大なスタジオに配置し、タクトを振るった大滝。ミュージシャンとのやり取りや、楽器に対するマイクの立て方など、当時の雰囲気がうかがえる写真も収録。

3/21 にリリースされる『NIAGARA TRIANGLE Vol.2 40th Anniversary Edition』とともに、大滝サウンドの魅力にどっぷり漬かっていただきたい。



※本書のシリーズはこの「～Vol.2」のみとなります。（2022 年 2 月時点）

■書誌情報

書名：大滝詠一 レコーディング・ダイアリー Vol.2
著者：堀内久彦
定価：本体 3,000 円＋税
発売：2022 年 3 月 18 日
発行：リットーミュージック
商品情報ページ　https://www.rittor-music.co.jp/product/detail/3121321001/

CONTENTS

・Introduction　大滝詠一のエンジニア前夜
・1979 年編
・1980 年編
・1981 年編
・1982 年編
・トラック・シート＆レコーディング・スナップ
・レコーディング用語解説
・曲名逆引き index

PROFILE

堀内久彦

音楽家／テクニカル・ライター。楽曲制作からマスタリングまでさまざまな音楽制作現場に携わりつつ、それらで得た実践的な知識をもとにレコーディング専門誌『サウンド＆レコーディング・マガジン』などで執筆活動も行う。
＜主な寄稿＞『バハマ・ベルリン・パリ〜加藤和彦　ヨーロッパ 3 部作』（2014 年）、大滝詠一『A LONG VACATION VOX』（2021 年）における「大瀧詠一『A LONG VACATION』を語る 4 万字インタビュー」および「各曲トラック・アナライズ」など。

【株式会社リットーミュージック】https://www.rittor-music.co.jp/
『ギター・マガジン』『サウンド＆レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー＆クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア＆コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 Rittor Base」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やエンタメ情報サイト『耳マン』、T シャツのオンデマンド販売サイト『TOD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】　https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証 1 部 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社リットーミュージック　広報担当　原見
Tel: 03-6837-4704 / E-mail: pr@rittor-music.co.jp